
無限の夢幻

莉雨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

無限の夢幻

【Nコード】

N2333H

【作者名】

莉雨

【あらすじ】

「私」が見る夢。それは、「彼」との未来。夢が現実？現実が夢？「無限」に続く「夢幻」の中に沈んでいく――。

私は、夢の中で彼と出逢う

沢山のビルが立ち並ぶ、そのビルの屋上場所で

そこにいるのは私と彼だけ

いつも彼は哀しそうな顔をして立っているのに

私がいる事に気がつく、私に笑ってみせる

そんな彼を見るのが、私は哀しくて、辛くて

私は必死に彼に向かって何かを叫ぶ

なのに、思った言葉は叫ばれることなく・・・

そこで目が覚めた。

いつからか、毎日見るようになった、不思議な夢。

夢の中に出てくる男の子も、その場所も、私にはまったく覚えがない。

これは私が作り出した空想なのか何なのか。また何の意味を表すのか。

私は何も知らず、また、何も分からなかった。

出逢う前から知っていた・・・――

トクン

心臓がはねる。目の前に、彼が立っていた。

「今日は何処に行こうか」

いつもの夢の中とは違い、笑顔で彼はそう言った。そんな彼を見て、私は何故だかとても嬉しくて。

「この前新しく出来たテーマパークにしようよ」

何故だか、口が勝手にそう言っていた。

いいよ、行こうか。

そう彼が言って、私たちは手をつないでそのテーマパークへと向かう。

何だか、普通のカップルみたいだな、って思った。

「ねえ」

「何？」

彼に話しかけようと思って、声をかける。

彼は振り向き、そして・・・。

声が出ない。視界がぼやける。

何で？

そう思ったら、見慣れた天井が映し出された。

「夢・・・か・・・」

なんだか今日は、いつも以上にリアルだったな、と思う。

それとも単に、いつもと違っていたからそう感じただけなのかもしれないけど。

そう、今日見た夢は初めてだった。

今まで見ていたのは、毎回まったく同じ夢。

初めて、彼の笑った顔を見た。彼の、笑った、顔。

思い出したら、また、心臓がはねた。

「貴方は、誰？」

そう問いかけても、もちろん答えてくれる人はいない。

それから、新しい夢をいくつも見た。

でも。

いくら夢を見ても、何も分からず。

彼は、彼のままだった。

夢の中の思い出だけが増え、

私の心は彼で埋まる――

ある日。

私の転校が決まった。

親の転勤で、引っ越すことになってしまったのだ。

今まで、ずっと一緒に学校に通っていた友達も大勢いるこの町から離れてしまうのは、とても寂しいことだったけど、私一人ここで生活するわけにも行かない。

私は生まれ育った町を旅立った。

新しい街は、以前の町よりも都会で、高いビルも沢山並んでいた。車の中で、

こんなに沢山ビルが立ち並んでいるなんて、慣れないわね。

そしてお母さんが言ったけど、私はそうは思わなかった。

すぐく、見慣れた景色。

ここは、夢の中の世界だった。

「昨日のドラマ見た？先週見るの忘れてたら、展開が変わりすぎちゃっててびっくりしたよ」

いつのまにか、彼が隣に座っていて、私に話しかける。それから、私たちはたわいのない会話を繰り返した。

「起きて。もう家に着いたわよ」

そのお母さんの声で目が覚めた。

私はいつのまにか眠っていたらしい。

彼は、何処にもいなかった。

私は夢の世界にやって来た

新しく転校した学校。

少し心配だったけど、上手くクラスになじめたと思う。

気の合う友達も出来た。

その友達と、話しながら廊下を歩く。私は、前を見ていなかった。

思いつきり、誰かとぶつかる。

身体がその衝撃に耐えられず、思わずこけそうになるところを、腕を掴まれ、何とかとどまった。

「ごめん、大丈夫？」

「ごめんなさい、前を見てなく・・・」

驚いた。

目の前には、彼が立っていた。

夢と現実の境界線が薄れる

——これは夢？それとも……

彼は、同じ学年で隣のクラスの人だった。

あれから、何度か話をし、一緒に遊びに行ったりしている。

俗に言う、付き合っている状態なのかもしれない。

夢の中の事があるせいかな、彼とは始めて会った感じがせず、
また、夢で見た出来事も度々起こっていた。

あれは、予知夢だったのかな？

最近、めっきり見る回数が減ってきたその夢を、私はそう思っていた。

彼との生活は幸せだったし、そうだと分かったことで安心して
いたのか、次第にその夢の事は気にしなくなっていた。

携帯の、着信音になる。

彼からの電話だった。

私たちがたまに行っているビルの屋上に、今いると言う。

急な呼び出しだったけど、私は暇だったし、彼に呼ばれるままそこに言った。

そして、辿り着いた私の目の前で、彼は――

私は自分の部屋にいた。

携帯電話を見れば、「着信あり」の文字。急いで家を飛び出すと、そのビルの屋上に向かう。私がついた時、彼は、屋上のフェンスの外にいた。

私は彼を止めようと、必死に叫ぶ。

なのに、声がでなかった。

彼は、振り向いて、私に気がついたのか、哀しそうに微笑む。

何で？何がどうなってるの？

私が駆け寄るより先に、彼はそこから・・・

私は、ビルの屋上に一人立ちほうけていた。

彼は、いない。

ビルの下を見下ろすことは恐くて出来なかった。

その場から一步も動けず、ただ、頬を涙が伝う。

ガチャン

その時、屋上のドアが開いた。

「どうしたの？」

彼が、そこには立っていた。

嗚呼、これが現実？それとも夢？

目の前に立っている彼は、いつもと変わらない彼に見えて。
夢なのか、現実なのか分からなかった。

「大丈夫？何で泣いてるの？」

慌てたように彼は私の元へ来て、涙を拭いてくれる。

その暖かさは、生きている温もりで……。

「これが、現実……」

私は、考える事を放棄した。

彼がここにいて、私と一緒にいる。

それだけが、今の私にとっての現実だから――。

今でも毎日、彼との夢を見る。

その彼はもう冷たくて、動いてはくれないけど。

その彼の隣で、私は静かに眠りにつくのだ。

ただ彼と、その温もりをなくさないために――・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2333h/>

無限の夢幻

2010年10月28日05時34分発行